

40年遅れの「のらくろ」世代

K.M. 1969年東京都生まれ

大卒後、まじめにサラリーマンをしていましたが、四十歳にして、新たな見識を求め立教の大学院に入学。日々さびついた頭の固さに悩まされながら論文取組み中。

小学4年生のとき、自己紹介の文集の中で、将来の夢として「兵隊さん」と書きました。

田河水泡の漫画「のらくろ」の影響でした。

当時、文庫サイズの復刻版が販売されており、子供の頃に読んでいたことを懐かしんで、父が買ってきたものでした。

クラスの中での文集発表のとき、同級生に笑われました。

「変なやつ」「日本に軍隊なんかないじゃん」「何言ってるの？」そんな反応だったと思います。

何かとても恥ずかしく、顔を真っ赤にしてうつむいた覚えがあります。

それ以降、自己紹介や文集での将来の夢の欄には、「電車の運転手」と書くことにしました。当たり障りがないからです。

それはともかく、今から思い返せば、「のらくろ」が、自分にとって「戦争」というものを認識した最初だったように思います。

「のらくろ」は、簡単に言えば、太平洋戦争のころの日本の世相を背景に、軍人となって、自分たちの仲間(祖国)を悪い外敵から守るというヒロイズムの中で、親も知らぬ野良の子犬であったのらくろが、軍に入隊し、友情を知り、弟分のような部下を持ち、厳格でありながら愛情あふれる父代わりとも言える上官からの厳しい指導を受けて、一人前の男(雄犬?)として成長していく様を描いたものです。

何かと悪さを働いてくる敵として山猿軍団が登場し、彼らを戦って打ち負かすことが、有無を言わさぬ正義として描かれているという点では、安直すぎる設定なのですが、漫画の中の1話1話のエピソードは、戦闘シーン中心というよりも、むしろ軍隊の中での訓練や余暇の中で、のらくろが引き起こす、ちょっと間の抜けた笑い話や、のらくろの機転でピンチを切り抜ける痛快話、ライバルや友人との競争話、落語のような落ちを迎えるずっこけ話といったものが、実は多かったです。

「のらくろ」が軍国主義礼讃であり、戦前から戦時中の少年たちの愛国心を煽る目的で書かれたものというよりも、当時の世相をそのまま漫画の世界に反映させ、その世界の中で、当時の少年たちの冒険心をくすぐり、ワクワクドキドキとした気持ちを楽しんでもらう漫画であったのだらうと思います。

物語の中で、のらくろは大尉となり大隊長まで進級します。しかし、その後、軍を辞めて予備役となり、今度は大陸へ金の鉱脈を探しに行くのです。

大陸へ行くための船賃を稼ぐために仕事をし、その貯めたお金で大陸へ渡る。そして、知り合った仲間とともに、金鉱がありそうな山を探しては、つるはしで掘る生活を経て、ついには金鉱山の経営者となる。そんな物語です。

まさに、戦前の日本の典型的な夢を描いたものだと思いますか？

そして、そんな漫画に、何故かのめり込んだのが、太平洋戦争終戦から20年後に生まれた自分ということになります。当時「のらくろ」をワクワクしながら読んでいた少年たちからは、約40年遅れということになるでしょうか。

そのことが、どのような影響を自分に与えたのかは、分かりません。ただ、いわゆる典型的な反戦教育や、逆に男の子にありがちな最新兵器へのあこがれといったものではなく、戦前戦中を通じた少年たちの気持ちを追体験することから、戦争というものを認識したと言えるのかもしれない。